祈り

思春期という季節

岩崎ゆう

新風舎

七さい人の祖母に捧ぐ —

序

移りゆく自然は、美しい言の葉を私のもとに届けてくれる。

たとえば、春。みぞれまじりの寒さの中で、一輪、また一輪と花をつける白梅。たとえば、秋。きびしい残暑の夕暮れに、聞こえてくる虫の音の涼しさ。

変わりゆく季節の美しさを身近にするたびに、私は日本に生まれた幸せを思う。

そして、人の一生もまた、四季にたとえられるだろう。春、夏、秋、冬。

人生が七十年、あるいは八十年であるとすれば、中学生、高校生は春という季節の住人といえるだろう。

「春はすごろく[双六]の振り出しみたいだ。」

という子供の詩を読んだことがある。春は暖かく、光にあふれ、夢や希望というイメージが似合う季節だろう。

芽吹き始めた若葉が、葉を広げ、ぐんぐん伸びてゆく春。日々、その淡い緑色が変化する美しいさまは、私の心を魅了する。しかし、平成という時を生きる生身(なまみ)の中学生や高校生は、どんな心の旅をしているのだろうか。

もちろん、部活動や将来の夢に向けて、いきいきと日々を送っている若者もいるだろう。けれどその一方で、豊かな時代にもかかわらず、精神的には焦燥感を抱え、飢えに苦しんでいる若者が少なくない。彼らのひりひりするような心の痛み。親や教師、社会に対する不器用だけれど純粋で真摯(しんし)な問いかけ。見えない未来。聞こえてこない答え。

そんな彼らを身近にして、彼らの澄んだ瞳、豊かな感性や知性にもふれ、若い命である彼らを受けとめ、育んでゆくことは、大人たちの大切なつとめではないかという思いに、私は胸が波立っていた。

祈り＊もくじ

序　4
第一章　少年事件が問いかけるもの　7
第二章　思春期とは　21
第三章　子供を受けとめる　39
―話をよく聞くということ―
第四章　親について　59
―「母性」と「父性」―
第五章　未来を担う子供たちのために　81
あとがき　98

第一章

少年事件が問いかけるもの

二〇〇三年七月、ある新聞の記事が私の目を引いた。
筆者はもうじき二十歳になる女子大生だった。「12歳の事件に私たちは何を」と題する文章は、
「私が中学生だった一九九七年、『神戸連続児童殺傷事件』が発生しました。」
と始まっている。そして、
「次に高校生だった二〇〇〇年、『西鉄バスジャック事件』が発生しました。犯人はまたも、私と同じ17歳の男の子でした。」
と続けている。そして、
「時は流れ、私は今年20歳になります。中学生だった酒鬼薔薇聖斗（さかきばらせいと）も、高校生だったバスジャック犯も、あの頃ひとくくりにされた私たちの世代は皆、大人になろうとしています。」
と語り、
「今、またしても悲しい事件が発生しました。私たちの『次の世代』が起こした事件です。昔、私たちの世代が事件を起こした時、社会は何を考え、何を思いましたか。

そしてまた次の世代が同じような事件を起こした今、皆さんは何を思うのでしょうか。

そして、『14歳』『17歳』だった私たちは、『大人』として何をなすべきなのでしょう。」

もうじき二十歳になる大学生は、自らを「大人」ととらえ、真っすぐなまなざしで、そう問いかけていた。

また同年、ある紙面に、

「家庭状況の精査を―専門家らの見方―」という見出しで、神戸事件で逮捕された男性（当時14歳）の付添人を務めた弁護士のコメントが載っていた。弁護士は当時14歳だった少年と直接会い、話をした数少ない大人の一人である。

弁護士は、

「神戸事件の場合、少年が家庭で温かい記憶がほとんどなかったことなどの鑑定結果から、『本当に必要なのは愛情』という認識が生まれ、少年院では職員が親代わりとなって見守るなどのきめ細かな処遇につながった。」

と述べている。

女子大生のオピニオンと弁護士のコメントは、どちらも小さな記事だった。けれどこの二つの記事が伝えようとしている内容は、重要で真摯に受けとめるべきものだと、私には思えてならなかった。その当時、長男は高校生、次男は中学生だったので、なおさらそう思えたのかもしれない。

「本当に必要なのは愛情」

この短いコメントは、私たちに何を伝えようとしているのだろうか。

お子さんがまだ小さい方にとっては、そんな当たり前なことが、鑑定結果から導き出されたものなのだろうか、と思われるかもしれない。また、親御さんの多くは、必要な愛情を私は子供にそそいでいる、と思われているかもしれない。

しかし、愛情の受け手である子供が、それを愛情と受けとっていなければ、親がいくら、「必要な愛情を子供にそそいでいる」と言っても、それは「愛」という名に値しない場合があるということを、私は子育ての日々の中から学んだ。

「三つ子のたましい百まで」
ということわざがあるが、目も見えず、首もすわらぬ新生児が感じ、受けとる愛。いわゆる「赤ちゃん」と呼ばれる時期の子供の感じる愛。「視・聴・嗅・味・触」の五つの感覚（五感）で赤ちゃんは愛情を受けとっている。そして、この大切な時期、子供はまだ「お話」が上手とは言えない。
親が問題を抱えて訪ねる、臨床（りんしょう）の現場におられる専門家の先生方は、「人が生きていく上での土台作りを怠らないでほしい」
というメッセージを発しておられる。

話がそれてしまうかもしれないが、ここで「甘え」について少しふれておきたいと思う。「甘え」については、精神科医の土居健郎先生の『「甘え」の構造』が有名であろう。
先生は「甘え」という語彙（ごい）は、日本独特のもので、「日本語に存し欧米語にそれに相当するものが存しない。」と書いておられる。そして、

立ち読みページはここでおわりです。

お立ち寄りありがとうございました。

またのご利用をお待ちしております。

新風舎
立ち読み横丁